



## 卒業おめでとう

歯学部長 花田 晃治

ご卒業おめでとうございます。

長かった6年間の勉学を遂げた今、晴れやかな希望に満ちていることでしょう。これから研修、大学院、就職と当面は修練の道は違いますが、将来の優れた臨床医、研究者を目指して、一日一日を自分で決めた道をまっすぐに楽しく生きてください。

これから皆さんが出てゆく日本の社会は経済・医療の発展を通じて世界中でも最高水準の長寿国となり、人生80年は現実のものとなっています。さらに、わが国における人口の超高齢化の特徴は、その進行が急速であること、高齢化率が世界のなかでもっとも高い水準に達することであり、この傾向はさらにスピードアップしています。

ところが長寿にあって最高の楽しみの一つである「食べる」ことに関係する口腔内についてみると残存歯数はわずかとなり、「食べ物がよく噛めない」「入れ歯が合わない」と訴えている老人は多数にのぼります。人間の寿命と歯の寿命が反比例しています。

皆さんの活躍が期待される21世紀では、こうした長寿化に加えて国際化、情報化、環境問題など

人類を取り囲む状況が大きく変わろうとしています。国際化に伴って疾患構造はボーダーレス化し、わが国において歯科医療を受ける患者さんも多国籍化することが考えられますし、皆さんも地球規模で活躍することが期待されるでしょう。国際的な評価に耐えるような知識、技術を身につける必要があります。その前にまず、口腔疾患の治療だけでなく、疾病の予防、リハビリテーション、介護、福祉まで一貫して考えられるようになることを期待されています。

今、社会は、歯科医師に対して幅広い教養、豊かな感性、きびしい倫理感をもっていることを求めています。これらは今までに受けた教育だけでは不十分で、生涯を通じた学習、研修によって得られるものです。そのうえで患者さん中心の、患者さんの立場に立った歯科医師として患者さんからの信用を得られることでしょう。

歯科医師という職業を真摯に受けとめながら、自信と勇気を持って、社会に対して積極的に貢献することを目指してください。皆さんの活躍を大いに期待しています。



## 第33回の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとう。

新潟大学歯学部附属病院長 河野正司

東には飯豊山や五頭連峰、南には八海山をはじめとする越後三山、そして海岸からいきなりそびえ立つ角田山と弥彦山に囲まれた、美しい自然の豊富な越後平野の中で、人生いかに過ごすべきかと哲学的な討論に、あるいは青春の華やかなページをかざる恋愛論に、さらには歯科医学の将来像についてと、悩み、楽しみ、新潟大学歯学部で6年間の学生生活を過ごされ、青春時代の貴重な思い出として、大学を巣立って行く皆さんに、心からのお祝いを申し上げます。このように学生時代を謳歌してきた新潟における過ぎ去ったこれらの出来事は、学生時代の良い思い出としてまた人生の糧として、一生心に残ることと思います。

新潟大学歯学部での厳しいカリキュラムを全てクリアーし、今日このように晴れ晴れしく卒業を迎え、晴れて歯学士となった皆さんは、大きな希望と一抹の不安をいだいて、今学窓を巣立とうとしています。

卒業後の進路は、直ちに臨床医として実社会へ第一歩を踏み出す人、研修医や大学院生として大学で臨床研修や歯学研究に取り組む人など様ざまですが、何れの道を歩もうとも、本学部で培われた「科学する心」と、慈しみの心をもつて患者さんのために尽くす「医の心」を決して忘れないで下さい。「患者さんのために」をキーワードとして「患者さんのために何をすべきか、何が出来るか」を常に自らに問い、真剣に考えて下さい。

新潟大学歯学部は、創設以来今日に至るまで、地域社会はもとより全国各地で活躍している多くの歯科臨床医を始め、保健・厚生行政官、教授・研究者を輩出しており、日本海側唯一の国立大学

歯学部として役割を果たして参りました。これからもこの「伝統」と「自負心」をもって更に大きな役割を果たすべく努力したいと思います、是非とも皆さんも、このような新潟大学歯学部の卒業生としての「誇り」とともに「責任」を持って、これからの荒波を乗り切ってください、そのためにも、卒業後も「科学する心」をもって日進月歩の新しい歯科医療の修得に努め、歯科医療従事者としての社会的責任を全うして下さい。

さて、皆さんもご存知のように、わが国は急ピッチで超高齢化社会を迎え、歯科疾患の疾病構造も変化し、患者さんの歯科に対する要求も多様かつ高度になってきつつあります。特にこれからは在宅歯科医療も含め、高齢有病者が増加し、口腔疾患と全身疾患との関連が益々重要になってきます。口を見て全身を見ないことのないよう、常に全身状態に対する注意を払うとともに、真に患者さんの意志を尊重した歯科診療を行うことを心がけて頂きたいと思います。

既に述べたように、皆さんは今、生涯学習のスタートラインに並んだところです、卒業後、これから本腰を入れて研鑽、研修に励むか否かで、患者さんを救う、良い歯科医師になれるかどうかが決まります。

大学を出て歯科医師免許を取得すれば、そのままずっと歯科医を続けていかれるほど、今の歯科は甘くはありません。絶えず研修を重ねて、常に新しいもの、自分の持っていないものを吸収し続けて行かなければなりません。これから長い歯科医としての人生です、健康に気をつけて頑張ってください。

## 卒業にあたって

### 第33期生 出口 知也



「新潟大学歯学部に入  
学して」(1年生夏)、「専門課  
程に進んで」(2年生夏)、  
「第23回歯学祭総評」(4年  
生秋)、「平成13年度歯学部  
運動会を終えて」(5年生  
夏)、「ポリフリを終えて総

診へ」(5年生冬)これまで、上記のような内容で、  
ほぼ1年に1回のペースで歯学部ニュースの原稿  
を書いてきました。1年生の6月に初めて書いた  
原稿を、今になって読み返してみると、ずいぶん  
面白いことを書いていたものだと思います。その  
ときには自分なりに一生懸命、文章を考えたも  
りでしたが、中には少し気恥ずかしいことも含  
まれていました。

今回、「卒業にあたって」ということで、歯学部  
の6年間を振り返りたいと思います。

6年間を振り返ると、解剖実習、歯学祭(文化  
祭)、運動会等も思い出深い出来事ではありまし  
た。やはりなんといっても、臨床実習の1年間が  
最も印象に残るものでありました。

他大学の歯学部の臨床実習は、「診療介助」(器  
具の手渡し、バキュームによる吸引、セメント練  
和など)までであるのに対し、新潟大学歯学部の  
臨床実習は「診療補助」(歯冠研磨、ラバーダム  
の装着、仮封材の除去など)、更には感染歯質除  
去、形成、充填などといった処置やカルテの記載  
まで行うものであります。そのため、本学でしか  
体験

できないことがたくさんあったのではないかと  
思います。

初めて患者の歯を削った時の感触は今でもは  
つきり覚えています。講義を聴いたり、本を読ん  
だりするだけでは決して分からない感触であり  
ました。

また、初めての抜歯は額にあぶら汗をかきな  
がらのものでありました。

他にも、レーザー光線を用いた知覚過敏処置  
や膿瘍切開、コンピューター入力によるカルテ  
の作成(歯科エキスパートシステム)などを  
経験することができました。

私個人が特に興味をもったのは、前述の「  
歯科エキスパートシステム」です。

第32期生までの臨床実習においてはカルテは  
基本的に手書きであったとのことですが、第33  
期生からコンピューター入力となりました。

「新潟大学附属病院1年分の診療記録がCD  
2~3枚に収録でき、情報管理の飛躍的な向上  
が期待できる」という話をオリエンテーション  
や特別講義で聞いたときには、大変驚きました。  
数年前から歯科医療の統計学や経済学に興味  
をもっていました。本学予防歯科大学院に進  
学するきっかけともなりました。

歯学部の6年間のことを考えると、上記の  
内容はごく一部の出来事であり、とても書き  
尽くせるものではありません。失敗すること  
もしばしばで、時には「やるが多すぎる」と  
気が動転するようなこともありましたが、  
そういったことも含めて、貴重な体験であ  
ったとしみじみ思います。

6年間で学んだことを活かして、卒業後も  
努力を重ねていきたいと思っております。